

## コウルリッジのコテージ・ガーデン

著者	吉川 朗子
雑誌名	神戸外大論叢
巻	61
号	4
ページ	129-147
発行年	2010-11-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00000403/">http://id.nii.ac.jp/1085/00000403/</a>

# コウルリッジのコテージ・ガーデン

吉川 朗子

## コテージ・ガーデンをめぐる18世紀末の文化・社会・政治的状况

イギリスにおけるコテージ・ガーデンは、19世紀から20世紀にかけて「幸福なる空間 (felicitous space)」「家庭の幸福 (domestic happiness)」「英国らしさ (Englishness)」などを表すアイコンとして整備されていくが、<sup>1</sup>これが注目され始めたのは18世紀最終四半世紀ごろのことである。一方ではピクチャレスク美学の影響からコテージ・ガーデンへの関心が高まり、他方では「隠遁文学」の伝統や原始主義 (primitivism) などの思潮の影響、ゲインズバラ (Thomas Gainsborough) の “cottage-door scenes” をはじめとするコテージ (ガーデン) を描いた絵や版画の人気などもあって、知識階級を中心に田舎や郊外のコテージに移り住んで庭を作るジェントリー階級が出てきた。<sup>2</sup>ここにはロンドンを中心としたタウン・ガーデン・ブーム、園芸産業の発展なども影響しているかもしれない。<sup>3</sup>

他方1790年代になると、ジョン・バレルが指摘するように、コテージ (ガーデン) のイメージは次第に政治化されていく。それまで隠遁詩やパストラルの系譜を引いた絵画や文学作品のなかで「政治闘争からの隠居」のイメージ

---

\* 本稿は第146回関西コウルリッジ研究会例会 (2010年6月26日、於同志社女子大学) における研究発表会原稿に加筆修正を施したものである。又、平成21-24年度科学研究費補助金 (基盤研究B) 「他文化=多文化への眼差し—コウルリッジとロマン主義文学における異文化間交渉の位相」 (代表大石和欣) によって遂行した研究の一部である。

1 Ford 29-48, Sayer 20-25, Helmreich など参照。

2 Scott-James 10, 27-33, 45-47; Hyams 82-84; Lloyd and Bird 10; Peachey 4-5など参照。

3 Longstaffe-Gowan 122-33参照。

を伝えていたコテージは、保守派、改革派双方のプロパガンダに使われるようになるのだ。対仏戦争開始直後の1790年代半ばには、コテージは「素朴で平和な家庭生活」を表すもの、英国が守るべき美徳の象徴となり、対仏戦争の大義を示すためのアイコンとして体制側に使われるようになる。他方改革派、急進派はこうした美化されたイメージに反発し、貧困にあえぐ人々の暮らす檻籠小屋、打ち捨てられた廃屋を、体制側を糾弾し戦争反対や社会改革を訴えるためのアイコンとしていく (Barrell 58)。バレルは改革派たちが廃屋に注目したことにしか触れていないが、彼らはまた、貧しい人々に庭付きのコテージを与えることで自活の道を与えるという社会改革運動にも関わっていく。モデル・ヴィレッジ建設もこのひとつの表われと言えらる<sup>4</sup>。19世紀になると次々に古いコテージが壊されて新しいコテージが作られていくが、これがまた新たな論争を呼ぶことになる。地域共同体の経済、周囲の自然となじんだ昔ながらのコテージ・ガーデンを懐かしむ保守派に対し、改革派はそのようなものは幻想であって、新たに提供したコテージの方が生産的な庭を持ち、機能的で衛生的であると反論する。工場労働者のために急いで作られた安普請のコテージを保守派が劣悪だと断ずれば、昔の古びたコテージの方が粗悪であると改革派が反論するといった具合だ。このように19世紀から20世紀にかけて、コテージ・ガーデンの「理想」と「現実」をめぐる数々の論争が展開されることになる<sup>5</sup>。

こうした矛盾に満ちたコテージのイメージに対して、ロマン派詩人たちはどのように反応したのだろうか。彼らの作品にはコテージ・ガーデンのイメージがしばしば登場し、サウジー (Robert Southey)、セルウォル (John Thelwall)、ワーズワス (William Wordsworth) などは自身コテージに暮らし、コテージ論も書いている。コウルリッジ (S. T. Coleridge) も「会話体詩」などでコテージ (ガーデン) への関心を示し、サマセットのネザー・

4 Scott-James 22-23; Elliot 64; Darley passim など参照。

5 Ford 32-34; Hunt [1986] 71-83 など参照。

ストウィーでは実際に庭を耕すなどしているが、彼の描くコテージ・ガーデンのイメージは少々曖昧に見える。本稿では、コウルリッジ初期の作品・手紙に描かれたコテージ・ガーデンのイメージを、当時の文化・社会・政治的文脈において読み直してみたい。

## “Kubla Khan” と “Conversation Poems”

セルウォルは *The Peripatetic* (1793) のなかのコテージについて論じた個所で、田舎の農夫の粗末ではあるが健康と心の平和に満ちた幸せなコテージ・ガーデンは、趣向を凝らした立派な風景庭園よりもはるかに好ましいとする。

What needs the lofty-vaulted dome,  
Where Grandeur draws the breath of price;  
Or spacious grove's exotic gloom,  
Where labour'd streams are taught to glide?  
 (“What needs the lofty-vaulted dome”, 1-4, *The Peripatetic*, p.133)

“spacious grove's exotic gloom” という描写からは、18世紀後半にチェンバーズ (William Chambers) が中国風のパゴダを持ち込んでキュー・ガーデンに作らせたという庭をはじめ、この時代園芸・庭園関連の本や旅行書の挿絵にしばしば描かれた異国趣味の庭、特に中国風庭園への文化的嗜好が窺われる。<sup>6</sup> コウルリッジが “Kubla Khan” で描いた庭もこの文化的嗜好に沿ったものと思われるが、この詩を書いた同じ頃、彼はまた会話体詩で全く違うタイプの庭—典型的な英国的コテージ・ガーデンをも描き出していた。セルウォルがコテージ・ガーデンと異国趣味の庭を対比させたように、コウルリッジもまた二つの庭を対照させるつもりだったのだろうか。セルウォルが田舎にあるコテージ・ガーデンの素朴な美しさを引き立たせるために異国

6 Toman 369, Hunt [2002] 56-57など参照。

趣味の壮麗な庭を持ち出した背景には、この時代の庭園文化において、異国趣味・オリエンタリズム嗜好はあるものの、すでにそういったものへの反発、批判も現れていたという事情がある。<sup>7</sup> そうした状況と照らし合わせるならば、“Kubla Khan”の壮麗な専制君主の庭は、サマセットの田舎家の素朴で家庭的な幸福感、英国らしさを再認識するための「他者」であったと言えることはできるかもしれない。

けれども“Kubla Khan”，「会話体詩」に描かれた庭はどちらも閉じた私的な空間である点に注目すると、対照的に見える両者の共通点が見えてくる。クブラが作らせた庭は、むろん6マイル四方という広い地所ではあるが、囲われた庭であることは明確に示されている。そしてそこには香りのよい花々の咲く木が植えてある。

So twice six miles of fertile ground  
With walls and towers were compassed round:  
And here were gardens bright with sinuous rills  
Where blossomed many an incense-bearing tree;  
And here were forests ancient as the hills,  
Enfolding sunny spots of greenery. (‘Kubla Khan’, 6-11)<sup>8</sup>

他方“Effusion XXXV”（のちに“The Eolian Harp”と呼ばれる作品）や“Reflections on having left a Place of Retirement”に描かれるコテージ・ガーデンにはバラ、ギンバイカ、ジャスミンなど馥郁たる香りの花がコテージを包み込むように植えられている。

[...] our cot o’ergrown  
With white-flowered jasmine, and the broad-leaved myrtle  
Meet emblems they of innocence and love), [...]  
 (“Effusion XXXV”, 3-5)<sup>9</sup>

7 Toman 390, Hunt [2002] 70など参照。

8 引用は Wu [2006] 620-22に収録されている現存する一番古い草稿（1804年2月以前のもの）からとった。その他のコウルリッジの引用も Wu に拠る。

9 1796年に発表されたものより引用。(Wu [2006], 600)

Low was our pretty cot; our tallest rose  
Peeped at the chamber-window. We could hear  
At silent noon, and eve, and early morn,  
The sea's faint murmur. In the open air  
Our myrtles blossomed, and across the porch  
Thick jasmines twined; the little landscape round  
Was green and woody and refreshed the eye.  
It was a spot which you might aptly call  
The Valley of Seclusion. [...]

(“Reflections on having left a Place of Retirement”, 1-9)

もちろん壮麗かつ幻想的、怪しげな異国情緒が溢れる専制君主の庭と、素朴で家庭的、穏やかで「英国的な」コテージ・ガーデンとでは、受ける印象は正反対とも言える。けれどもこれらはどちらも閉じた空間であり、世の喧騒を逃れ、感覚の喜びに浸ることのできる場所として描かれている点で共通する。“Kubla Khan”はコウルリッジがサマセットの人里離れた奥地にある農家に引きこもって書いた作品であり、アヘンの力を借りて一時的に現実逃避をしてもぐりこんだ夢の世界である。「会話体詩」に描かれる馥郁たる香りのコテージ・ガーデンもまた、一時現実を忘れて逃げ込む隠れ家である。どちらも政治的喧騒を逃れ、田舎に引きこもりたいという隠遁願望を表しているとも言える。

けれども、コウルリッジはこうした閉じた私的な空間における安穩とした暮らしに満足することはできない。“Kubla Khan”では、庭を流れる小川は地下へもぐり堀の外の海へとつながっていて、その海は未来の戦争を予言する過去の声を伝えてくる。また“Effusion”や“Reflections…”でも、庭の静けさ、穏やかさのなか遠くの海の音が意識されており、それは詩人に多くの人々が苦しむ外の社会を思い起こさせる。

[...] Was it right,

While my unnumbered brethren toiled and bled,  
That I should dream away the trusted hours  
On rose-leaf beds, pamp'ring the coward heart  
With feelings all too delicate for use?

(“Reflections …”, 44-48)

家庭的な閉じた空間にこもっていることに後ろめたさを感じるコウルリッジは、外の社会と関わるべく、隠れ家を出ていくことを決心する。詩の最後では、まだ家庭的な幸福に未練が残っていることが示されているが、そこでも「海の風を恐れないギンバイカ」のイメージを出すことで、「家庭の幸福」を求めつつも「外の世界」と関わっていこうとする姿勢を示す。

My spirit shall revisit thee, dear cot!  
Thy jasmine and thy window-peeping rose,  
And myrtles fearless of the mild sea-air;

(“Reflections …”, 65-67)

ところで、これらの「会話体詩」に描かれるコテージ・ガーデンと“Kubla Khan”に描かれる庭とに共通するもう一つの点は、それらが「安逸の庭」であって「働く庭」ではないという点である。また庭の描かれ方も型どおりであって「生きた庭」という感じがしない。“Kubla Khan”の庭は、たとえサマセットの風景がモデルになっていたとしても、パーチェスをはじめ多くの文学的アリュージョンに満ちた人工的な庭と言える。<sup>10</sup> “Effusion …”に描かれるコテージを包み込む「白いジャスミンと丸い葉のギンバイカ」のイメージも、指摘されているように、ミルトンの *Paradise Lost* (iv, 694, 698) に出てくるアダムとイブの「幸福なるあずまや」のイメージを引き継いだものであり、「幸福なる田舎屋」の典型的イメージをヴィネットに仕立てたような印象を受ける。

10 Holmes は Milton の *Paradise Lost*, James Bruce の *Travels to Discover the Source of the Nile*, William Bartram の *Travels through North and South Carolina*, Thomas Burnet の *Sacred Theory of the Earth* などの影響を指摘している (Holmes 164)。

「会話体詩」に描かれたコテージ・ガーデンのイメージは、1790年代に都会に住む一般大衆向けに数多く出回ったという版画刷りのコテージ画を想起させる。それらは、蔓植物の花や果樹に包み込まれた田舎家の庭先で家族が団欒する様子をノスタルジックに描きだしたものであって、そこには農村の厳しい現実はいささか感じられない。あるいはペイリー (William Paley) が “The Reason for Contentment, addressed to the Laboring Part of the British Public” (1793) で描き出したような、体制派の宣伝用に使われた「幸福な田舎屋」のイメージとも通じる (Barrel 60-61)。

[...] if the face of happiness can any where be seen, it is in the summer evening of a country village; where, after the labours of the day, each man at his door, with his children, amongst his neighbours, feels his frame and his heart at rest, everything about him pleased and pleasing, and a delight and complacency in his sensations far beyond what either luxury or diversion can afford. The rich want this; and they want what they must never have.<sup>11</sup>

ペイリーは、田舎家の戸口に集う家族の姿を描いたゲインズバラの絵を想起させるイメージを持ち出して、清貧の暮らしにこそ満足、幸福はあるのだから、改革など起してフランスの二の舞にならないようにせよ、と中・上流階級の人々に説いている。やはりここからも貧困にあえぐ農村の現実はいささか隠されている。このようにして体制側は「コテージ牧歌」とでも呼ぶべきものを作り出し、古き良き英国の田舎家の幸せを守ることを対仏戦争の大義名分にしていく。あるいは国民の目を国内・家庭内の幸福に向けさせ、国外で起きていることに目を向けさせないようにする。コウルリッジが “Reflections…” で、素朴な田舎屋での暮らしに未練を残しつつもここを出なければならぬと決意するのは、コテージがもつこのような文化的・政治的意味合いがあったからだろう。

11 Paley 932.



そして“Fears in Solitude”では、コウルリッジはこうした事態—体制側が作り出した「幸福な家庭」のイメージに安穩として、英国が外で行っている非道、あるいは同胞が外で戦って悲惨な目にあっていることを想像しようともせずに戦意を煽っている国民のことを憂える。この詩ではブリテン島の田園風景が理想化されて描かれ、故国への愛が示されるが、体制側が同じ理想化された風景を国粋主義、対仏戦争の大義名分に用いるのに対し、コウルリッジは国への愛を示しつつもその現状を憂えている。ここで興味深いのは、このブリテン島が「海と岩盤という要塞に囲まれた緑豊かな平和で静かな島」<sup>12</sup>というイメージで表象されている点である。そのイメージは、肥沃な緑の大地を囲わせて造らせたという、クブラの広大な庭と重なってくる。“Kubla Khan”に描かれた風景がサマセットのそれを基にしているとするならば、<sup>13</sup>クブラの囲われた庭の風景と“Fears in Solitude”における島の風景とは、同じトポグラフィのネガとポジと言えらるだろう。“Fears in Solitude”においても、“Kubla Khan”あるいは会話体詩においても、コウルリッジは庭的空間における感覚的な喜びを描きつつも、常にそうした閉じた空間の外側に関心を向けさせようとするのだ。

## The Working Garden

ところでバレルは、対仏戦争のさなかに体制側が盛んに広めようとした「幸福な田舎屋」のイメージは、悲惨な現実とあまりにかけ離れていてかえって貧しい人々の反感を買ったのではないか、愛国心、戦意を高めること

---

12 “beauteous island” (194), “green and silent spot” (1), “peace long preserved by fleets and perilous seas” (87), “Within the limits of thy rocky shores” (181)などの言葉で表されている。

13 Edward Thomasは*In Pursuit of Spring* (1914)でコントック丘陵の風景のなかに“Kubla Khan”に描かれる地誌の特徴を見出す(280-81)。Richard Holmesもまた、サマセットの地誌の特徴がいかに“Kubla Khan”の舞台作りヒントを与えているかに着目している(Holmes 164)。また最近のJ.C.C. Maysの詳しいリサーチによれば、コウルリッジが“Kubla Khan”を書いたのと同じ頃、Porlock 湾を望む切り立った崖の上にあるAshley Combeに莫大なお金をかけて歓楽宮を造ったKing という貴族がいたという(Mays13-15)。

には貢献しなかったのではないかと指摘している。<sup>14</sup>では、18世紀末の田舎のコテージの現実とはどういうものだったのだろうか。先にも触れたが、急進派として国家から常に監視の目を向けられ危険視されていたセルウォルが *The Peripatetic* のなかで書いたコテージ論には、ロンドン近郊の村の、蔦の絡まる田舎屋、素朴な木戸、ハーブの植わった庭、生垣の美しさが描かれ、貧しいながらも清く正しく健康で勤勉に暮らす人々の幸せが描き出されている。

Can any thing more enliven the scene than the pranks of ruddy infants, poured from beneath the lowly roof? The whistle of the honest husbandman, trudging cheerfully to his toil at morn? or his plodding gait, at evening, when, wearied with his daily task, propping his steps upon the crooked staff, snatched promiscuously from the adjacent thicket, he returns contentedly home, and smiles to see the little column of smoke circling his chimney, which betokens the preparation for his homely repast? (137)

やはりゲインズバラを思わせるノスタルジックなこの描写は、一見保守派の書いたものと変わらない。けれどもセルウォルはこれに続けて、こうした貧しい人々のコテージと庭が「土地改良 (Improvement)」の名の下に破壊され、行き場を失った人々が都会へ流れ劣悪な住環境に押し込まれているという状況があることを指摘し、地主階級の非道を告発する。また田舎においても、地域によっては厳しい天候のために村全体が飢饉に陥り、貧しい人々はどんなにまじめに働いても過酷な状況を抜け出すことが出来ずにいることも指摘している。

「土地改良」の名の下に（風景庭園を整備するため、あるいは農地・牧草地を大規模化して生産性を上げるため）行われた村やコテージの破壊につい

---

14 長引く戦争による重税、天候不順による凶作のせいで1795年はとりわけひどい経済状況になっていたことをバレルは指摘している (Barrell 68)。

ては、ゴールドスミス (Oliver Goldsmith) の “The Deserted Village” (1770) などでも非難されている。また、時代は下るがサウジーなども *Colloquies* (1829) のなかで、昔ながらの美しく幸せな農村のコテージが破壊され、工場労働者のための醜悪な掘っ立て小屋が作られていることを嘆いている。けれども、古いコテージの破壊と新しいコテージの建設は必ずしも悪いばかりではなかった。貧しい人々のコテージを破壊した地主たちのなかには、慈善の心から、あるいは見栄のため、あるいは非難を免れるために、こざい庭付きのコテージをかわりに建ててやる者もいた。なかには村ひとつ丸ごと移し変え作り変えるケースもあり、18世紀初頭から「囲い込み」、風景庭園造園ブームとともに始まったモデル・ヴィレッジの建設は、19世紀を通して盛んになっていく。初めのうちは画一的なものが多く、美的観点からもあるいは快適さの点でも不十分なものも多かったが、やがて建築家が村やコテージの設計を担うようになるとピクチャレスクなものも作られるようになる。あるいは社会改革運動が高まってくると庭付きの快適なコテージも作られるようになった。地主たちは時流に乗り遅れないよう、競ってコテージの建て替えを行ったのである。理由は何であれ前よりも住環境がよくなったことは確かだろう。同時にあてがわれた庭では、野菜や葉草、果実などを育てることもできた。<sup>15</sup>

トマス・バーナード (Sir Thomas Bernard) は *An Account of a Cottage and Garden near Tadcaster, with Observations upon labourers having freehold cottages and gardens and upon a plan for supplying cottagers with cows* (1797) において、当時の救貧法 (Poor Law) を批判し、貧しい労働者に庭付きのコテージを与えることこそが教区の経済、社会

---

15 この時代、中・上流階級の間ではガーデン・ツアー、カントリー・ハウス・ツアーというもののが流行り、地主たちは自分の領内の村、コテージもこざいにしておくことが求められたのである。G. S. Repton と John Nash がデザインを手がけた Blaise Hamlet などはピクチャレスクな村の有名な例であり、やがてこうしたピクチャレスク・コテージをめぐるツアーも盛んになっていく。Scott-James 22-23, Jacques 197-98, Darley 10, 47-62など。

にとってもよいことであると説いている。彼がその根拠としてあげるのがヨークシャー北部タドカスターという村の近くに住むブリトン・アボットという67歳の農夫の話である。若い頃囲い込みで家を失った彼は、地主に頼んで道路わきの小さな土地を借り、ここにコテージを建てて庭を作る。地主はきちんと整えられた庭を見て悦び、賃料をただにしてくれた。そのうち庭からの収穫物も収入源となり暮らし向きもよくなったという話である。この逸話を挙げてバーナードは、労働者に勤勉を奨励しうまく経済活動に組み込んでやるのが社会全体にとってもよいと説く。貧しい人のなかの怠け者と働き者の区別をきちんとし、勤勉な者が報われるような仕組みを作る必要がある、労働者にコテージを与える費用は救貧院 (poorhouse) に費やす費用の十分の一で済むだろうし、これによって救貧税 (poor rate) も少なく済むだろうと力説する。また、庭は健全な余暇の過ごし場所となり、人々が暇なときに居酒屋に出かけてギャンブルにはまることもなくなるから、社会道徳的にも庭は良い効果をもたらすだろうと説く。<sup>16</sup> 同じようなことはアーサー・ヤング (Arthur Young) も主張している。彼もまた現在の救貧法は間違っているとし、労働者に菜園を作り牛を飼うことのできる土地を与えることが大事だと説く。<sup>17</sup> このように、社会改革者たちは19世紀を通して、労働者階級の生活状況改善のために庭あるいは小さな畑をあてがう運動を展開していく (Sayer 88)。

バーナードの報告書は—無論これは幸福な一例であって典型的とは言えないだろうが—18世紀末の労働者のコテージ・ガーデンの現実を伝えてくれている。庭の広さは1ルード=1/4エーカー (約1,000m<sup>2</sup>) 程度で、きちんと刈り込まれた生垣に囲われている。庭には15本の林檎の木、1本のセイヨウスモモ、ワイン用のプラムの木が3本、杏が2本、グースベリーやスグリ

---

16 この考え方はその後ヴィクトリア朝の道徳概念にも合致し、庭作りは中産階級以下の人々にとって健全で道徳的、生産的な余暇の過ごし方として広く奨励されていくようになる。Constantine 387-406を参照のこと。

17 Young [1971] 21-22 (quoted in Sayer 85-86)

の茂み、豊富な野菜、3個の蜂の巣があると描写されている (Bernard 3)。ここに提示されているのも幸福なコテージ・ガーデンのイメージであるが、保守派が描き出した「コテージ牧歌」とは全く違う種類のものである。農村の暮らしの素朴な幸せをただノスタルジックに描くのではなく、労働者が幸せに暮らすためにはこれだけのものが必要であるということを、社会改革のひとつの目標、モデルとして提示している。これは働く庭、裏庭であって、表通りに面した観賞用の庭、「絵になる庭」ではない。

花よりも果樹中心のコテージ・ガーデンの描写は、ワーズワスの“The Ruined Cottage”における庭の描写を思い起こさせる。この詩でも、荒れ果てる前の庭は、花だけでなくグースベリーやスグリの茂み、林檎の木、ハーブ類、野菜類が植えられており、マーガレットと夫ロバートが日暮れまで仕事に励んだ「働く庭」であった。この作品における丁寧な庭の描写には、ワーズワス自身レイスダウンやオルフォックスデンで庭を耕していた体験、またオルフォックスデン近くを散歩しながらコテージ・ガーデンをはじめ様々な庭を見て回った経験が生かされているだろうが、この庭めぐりにはコウルリッジも同行していた<sup>18</sup>。彼はまたパンティソクラシー計画では畑を耕す生活を想定していたし、ネザー・ストウィーでは実際庭を耕していた。コウルリッジもまた、「絵になる庭」だけでなく、労働者の現実の庭、働く庭に関心があった。

“Reflections…”で安逸なる庭を出て社会と関わることを決意したコウルリッジは、しばらくブリストルで暮らして *The Watchman* の編集に打ち込むが、やがて再び田舎に引きこもることを決意する。その事情について、コウルリッジは1796年10月15日付の Lloyd への手紙で次のように記している。

I have [...] determined to retire once for all and utterly from cities and towns: and am about to take a cottage and half a dozen acres

---

18 Dorothy Wordsworth の *Alfoxden Journals* を参照のこと。

of land in an enchanting Situation about eight miles from Bridgewater. [...] above all, because I am anxious that my children should be bred up from earliest infancy in the simplicity of peasants, their food, dress, and habits, completely rustic. (*CL*, i, 240)

確かに、ここに表明されているのは隠遁願望であり、描かれているのは都会から見た理想的田舎像である。しかし“Effusion…”や“Reflections…”に描かれる隠遁願望との大きな違いは、6エーカーの土地付であることが言及されていることから推測されるように、これがバラやジャスミンやギンバイカに飾られた安逸の場所ではなく、働く場所としてのコテージ・ガーデンであるという点である。1796年秋から冬にかけてコウルリッジが書いた複数の手紙には「畑を耕す仕事 (the labours of the field)」をして暮らしたい、「自給自足の庭師 (self-maintaining gardener)」になりたい (*CL*, i, 249)、「園芸家兼農夫 (an Horticulturist & a Farmer)」になりたい (*CL*, i, 260)といった願いが繰り返し吐露されており、ネザー・ストウイーに友人トマス・プールが見つけてくれた庭付きの小屋に暮らすことに大きな期待を寄せていることが分かる。そしてその期待は、馥郁たる花が戸口を飾るコテージでの安逸な暮らしではなく、額に汗をし、手に豆を作って働く生活、勤勉で清貧な暮らしをする代わりに食料と健康と静穏を手に入れるという生活に対するものである (*CL*, i, 275)。さらに彼は、ネザー・ストウイーでの暮らしはけっして社会からの隠遁ではないということも強調している。「私は公的な生活には向かないが、私のコテージの窓から漏れるろうそくの光は遠くまで流れていけよう」(*CL*, i, 277)と述べているように、コウルリッジは庭を耕す生活を、外界、社会との関わりを保つ暮らしであるとみなしていたことが分かる。家族や友人とともに土地を耕し、読書をし、ものを書き、語り合うという生活、これはまさにパンティソクラシー計画で彼が夢見た暮らし方である。ホームズは“Reflections …”について「田舎における平和なコテージという幸福なイメージは、パンティソクラシーから直接派生したもの

であろう」(Holmes 104) と評しているが、労働しない庭は真のパンティソクラシーとは言えない。パンティソクラティックな暮らしは、ネザー・ストウィーへ移って初めて実現する。

I never go to Bristol—from seven to half past eight I work in my garden; from breakfast till 12 I read & compose; then work again—feed the pigs, poultry&c, till two o'clock—after dinner work again till Tea—from Tea till supper *review*. So jogs the day; & I am happy. [...] I raise potatoes & all manner of vegetables; have an Orchard; & shall raise Corn with the spade enough for my family.—We have two pigs, & Ducks & Geese. (Coleridge to Thelwall, 6 February 1797, *CL*, i, 308)

この手紙から窺えるように、庭にはジャガイモや野菜、穀物が植えられているだけでなく、豚やアヒル、ガチョウなども飼われていた。まさにヤングやバーナードら社会改革派が労働者に与えようとしていた庭である。この庭で肉体労働をしながら文筆活動を行い、プールやラム、ワーズワスらとの知的交流を愉しむという暮らしが営まれた。そのパンティソクラティックな暮らしぶりはセルウォルの詩からも窺われる。

Ah! 'twould be sweet, beneath the neighb'ring thatch,  
In philosophic amity to dwell,  
Inditing moral verse, or tale, or theme,  
Gay or instructive. And it would be sweet,  
With kindly interchange of mutual aid,  
To delve our little garden plots, the while  
Sweet converse flowed, suspending oft the arm  
And half-driven spade, while, eager, one propounds,  
And listens one, weighing each pregnant word,  
And pondering fit reply that may untwist  
The knotty point. [...]

[……]

And 'twould be sweet, my Samuel (ah, most sweet!)

To see our little infants stretch their limbs

In gambols unrestrained, and early learn

Practical love, and—wisdom's noblest lore—

Fraternal kindness, while rosiest health

Bloomed on their sunburnt cheeks. [...]

(“Lines Written at Bridgwater in Somersetshire”, 91-101, 114-120,  
my underline<sup>19</sup>)

ここには友情、大地、精神を耕すという理想的な共同体の暮らしが描かれている。fraternalという言葉はフランス革命を意識しているだろうし、パンティソクラシーの理念にも通じるものだろう。この庭が木戸一枚で隣人プールの庭にも繋がっていることに象徴されるように、これは労働と会話を通じて外の社会との連絡を保つ庭である。こうした庭と比べたら、“Kubla Khan”の庭はもちろん、“Effusion …”や“Reflections…”に描かれた庭でさえも、外とのつながりを絶った閉鎖的な空間であるという点で、また働かない安逸の庭であるという点で、反パンティソクラティックであると言える。セイヤーは整形形式庭園とコテージ・ガーデンの庭空間の違いを比較して、庭の塀が囲い込むのは前者の場合「公的な領域」「文化」であり、後者の場合は「私的な領域」「自然」であるとまとめている (Sayer 39-42)。コウルリッジの「会話体詩」に描かれるコテージ・ガーデンは、無論この後者の「私的な領域」になる。それに対して彼がネザー・ストウイーで目指したのは、「公的領域」との交渉を閉ざさない「私的な領域」であったと言えるだろう。文化／自然、公／私の区別のない—あるいは文化と自然、公と私とが交渉する場としての庭空間が、コウルリッジの目指した理想の庭だったのではないだろうか。

セルウォルのこの詩でもう一点確認しておきたいのは、庭仕事という場が

19 Wu [2006] 324-25.



友人との親交を深め、思想を交し合う場とされている点である。むしろ精神活動の方が重視されていると言ってもいい。コウルリッジもまた、後にネザー・ストウィーでの生活を振り返って「隣に住んでいた紳士の庭は私の小さな果樹園と繋がっていた。彼との友情を耕すことこそが、ストウィーを居住場所として選んだ唯一の動機だった」(*Biographia Literaria*, chap 10)と書いている。ネザー・ストウィーでの *cultivation* には、文字通りの意味だけでなく比喩的な意味合いも含まれていた。むしろ比喩的な意味合いの方が強かった。そしてそのことが結局このパンティソクラティックなコテージ・ガーデンの生活が長続きしなかった理由かもしれない。コウルリッジにおいては常に、田舎に引きこもり家庭的な暮らしを営むことへの憧れと、都会へ出て社会と関わろうという衝動との間の葛藤が見られ、彼の庭のイメージにおける力学にもそうした内向・外向二つの方向性が見られるが、ネザー・ストウィーのコテージ・ガーデンにおいては、庭と精神の両方を耕すことを通してそのバランスがうまく保たれていた。しかし *cultivation* が身体的な意味を失い、比喩的な意味に収斂されていくと、庭は再び閉じた世界、絵に描いた世界になってしまう。結局彼はこの庭を出て行かざるを得なくなるのだ。ネザー・ストウィーを出た後のコウルリッジは、庭を耕す生活に積極的な興味を示すことはなくなる。<sup>20</sup>かわりに彼は友情を耕し、自分そして社会の精神を耕すという方向へ向っていく。

## 結 び

結局、コウルリッジが庭に実質的、持続的な興味を示したのはサマセットにいたときだけだった。この庭作りへの一時的な熱狂の正体は何だったのだろうか。セイヤーはサイドの言葉を借りて、「サイドは東洋的なものについて、それは『代理のあるいは潜在的自我』であると言っているが、こ

---

20 湖水地方に移り住んだときには、時折グラスミアのダヴ・コテージでワーズワスたちの庭仕事を手伝ったり、ケジックのグレッタ・ホールでサウジー一家の庭仕事を手伝ったりはしていた。

れはイギリスの田舎にも当てはまる。西洋が『東洋に相対化する形で自己を規定し力をつけた』のと同じように、都会は田舎に相対化する形で自己を規定した。しかしながら、どちらの場合も他者は不可思議で魅力的なものとなった」(Sayer 3) と述べ、田舎礼賛とオリエンタリズムの精神構造を同じであるとしている。“Kubla Khan”に描かれたようなオリエントの庭は、確かに英国的価値を見出すための他者であり得ただろう。けれども、その庭と“Fears in Solitude”で描き出された「英国的風景」とが同じトポグラフィのネガとポジであったとすれば、それらはともに都会的自我が自己規定するための「他者」となったと言えるだろう。また、“Effusion …”や“Reflections…”に描かれた「英国的な」コテージ・ガーデンを、クブラの庭とともに「囲われた私的な庭」「安逸の庭」の表象と捉えるならば、これらの庭はともに、コウルリッジが本当の意味でのパンティソクラティックな庭—「働く庭」, 「共同体としての庭」, 「社会との繋がりを保った庭」—をネザー・ストウィーで実現するための「他者」になったと言えるかもしれない。けれどもこうした理想的な庭も、彼がここを出て、ワーズワスがこれを代わりに湖水地方で実現することにより、コウルリッジにとって新たな「他者」となっていく。<sup>21</sup>

---

21 コウルリッジは1803年10月トマス・プールに宛てた手紙の中で、ワーズワスがすっかり家庭的な幸福に満足して人類救済を目的とする大作 *The Recluse* に取り組むことを諦めてしまっていることに対する苛立ちを表明している (CL, ii, 1013)。かつては家庭的な暮らしから力を得て詩を書いていたコウルリッジが、ワーズワスを「他者」として、それまでとは違う自我の確立を目指そうとしていることが窺える。他方、ワーズワスは1813年ライダル・マウントに移り住むが、この家と庭はやがてヴィクトリア朝的価値観—the cult of hearth & home—toに組み込まれていく。これについて Stephen Gill は “Earlier in the century both Coleridge and Keats had seen it as a fault that Wordsworth was content to ease himself into domesticity. … Now it was deemed one of Wordsworth’s most admirable qualities that he had drawn such strength from domestic life and that he had maintained a household of women in one beloved home for so many years” (Gill 208-209) と評している。ライダル・マウントの庭はワーズワスにとって、庭を耕し、詩作を行い、家庭生活を楽しむ場であると同時に、大勢の文学愛好者、旅行者、近所の人々の訪問を受ける社交の場でもあった。

## Work Cited:

- Barrell, John. "Spectacles for Republicans", *Sensation and Sensibility: Viewing Gainsborough's Cottage Door*. Ed. Ann Bermingham. New Haven: Yale UP, 2005, 53-73.
- Bernard, Sir Thomas. *An Account of a Cottage and Garden, near Tadcaster, with Observations upon labourers having freehold cottages and gardens, and upon a plan for supplying cottagers with cows*. London, 1797.
- Coleridge, Samuel Taylor. *Biographia Literaria*. Ed. James Engell and W. J. Bate. Princeton: Princeton UP, 1984.
- . *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*. Ed. Earl Leslie Griggs. 6 vols. Oxford: Clarendon Press, 1956-72.
- Constantine, Stephen. "Amateur Gardening and Popular Recreation in the 19<sup>th</sup> and 20<sup>th</sup> Centuries", *Journal of Social History* 14 (Spring 1981) : 387-406.
- Darley, Gillian. *Villages of Vision*. London: Paladin Books, 1987.
- Elliot, Brent. *Victorian Gardens*. London: Batsford, 1986.
- Ford, George H. "Felicitous Space: The Cottage Controversy", *Nature and the Victorian Imagination*. Ed. U. C. Knoepflemacher and G. B. Tennyson. Berkley: University of California Press, 1977, 29-48.
- Gill, Stephen. *Wordsworth and the Victorians*. Oxford: Oxford UP, 1998.
- Helmreich, Anne. *The English Garden and National Identity: The Competing Styles of Garden Design, 1870-1914*. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- Holmes, Richard. *Coleridge: Early Visions*. London: Penguin Books, 1990.
- Hunt, John Dixon. "The Cult of the Cottage", *The Lake District: A Sort of National Property*. London: Victoria & Albert Museum, 1986, 71-83.
- . *The Picturesque Garden in Europe*. London: Thames and Hudson, 2002.
- Hyams, Edward. *English Cottage Gardens*. Whitter Books, 1970. Harmonsworth: Penguin Books, 1987.
- Jacques, David. *Georgian Gardens: The Right of Nature*. London: Batsford, 1983.
- Lloyd, Christophe and Richard Bird. *The Cottage Garden*. London: Dorling Kindersley, 1990.
- Longstaffe-Gowan, Todd. "Gardening and the Middle Classes 1700-1830", *London's Pride: the Glorious History of the Capital's Gardens*. Ed. Mireille Galinou. London: Anaya Publishers Ltd., 1990, 122-33.
- Mays, J. C. C. "King Kubla's folly", *TLS* (August 1, 2008) :13-15.
- Paley, William. *The Works of William Paley*. Longman, 1832.

- Peachery, Stuart. *Farmhouse and Cottage Gardens 1580-1660*. Bristol: Stuart Press, 1996.
- Sayer, Karen. *Country Cottages: A Cultural History*. Manchester: Manchester UP, 2000.
- Scott-James, Anne. *The Cottage Garden*. Harmondsworth: Penguin Books, 1982.
- Thomas, Edward. *In Pursuit of Spring*. London, 1914.
- Toman, Rolf, ed. *European Garden Design: From Classical Antiquity to the Present Day*. Köln: Ullmann, 2007.
- Wordsworth, Dorothy. *Journals of Dorothy Wordsworth*. Ed. Earnest De Selincourt. 2 vols. London: Macmillan, 1952.
- Wordsworth, William. *The Ruined Cottage and The Pedlar*. Ed. James Butler. Ithaca: Cornell UP, 1979.
- Wu, Duncan. *Romanticism: An Anthology*. 3<sup>rd</sup> edition. Malden, Mass. : Blackwell, 2006.
- Young, Arthur. *General View of the Agriculture of the Country of Hartfordshire, Drawn up for the Consideration of the Board of Agriculture and Internal Improvement*. Newton Abbot, 1804. 1971.